



2021

年度アカデミック・ポートフォリオ作成ワークショップ開催報告

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 大阪公立大学工業高等専門学校 公開日: 2024-02-02 キーワード (Ja): アカデミック・ポートフォリオ, 教育改善, 統合, メンティー, メンター, ワークショップ キーワード (En): 作成者: 北野, 健一, 伏見, 裕子, 勇, 地有理, 東田, 卓, 山下, 良樹, 栗田, 佳代子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/0002000283

2021 年度アカデミック・ポートフォリオ 作成ワークショップ開催報告

北野健一*¹, 伏見裕子*¹, 勇地有理*²,
東田卓*³, 山下良樹*⁴, 栗田佳代子*⁵

A Report on the Workshop of Academic Portfolio in 2021

Ken'ichi KITANO*¹, Yuko FUSHIMI*¹, Chiari ISAMI*²,
Suguru HIGASHIDA*³, Yoshiki YAMASHITA*⁴, and Kayoko KURITA*⁵

要旨

大阪公立大学高専は、2012 年 3 月に全国の高等教育機関で初めて学内・対面でアカデミック・ポートフォリオ作成ワークショップを開催した。その後、毎年 2~3 回のワークショップを対面で開催し、教育改善に取り組んできたが、2020 年から始まった新型コロナの流行により、対面でのワークショップ開催は断念せざるを得なくなった。そこで同様のワークショップをオンラインで開催できないか模索し、2021 年度にオンライン型のワークショップを 2 回開催することができた。本稿では、2021 年度に開催したアカデミック・ポートフォリオ作成ワークショップの概要について説明した後、ワークショップ参加者の感想をメンティー・メンター双方の立場から述べる。また、ワークショップ後にメンティーに対して実施したアンケートの結果から対面開催との差異について考察する。

キーワード: アカデミック・ポートフォリオ, 教育改善, 統合, メンティー, メンター, ワークショップ

1. はじめに

アカデミック・ポートフォリオ (以下 AP) とは、「教育、研究、サービス活動 (社会貢献・管理運営等) の業績についての自己省察による記述部分およびその記述を裏付ける根拠資料の集合体であり、教員の最も重要な成果に関する情報をまとめた記録」である[1]。

AP の最大の特徴は、教育・研究・サービス活動、互いの連携・寄与について考察する「統合」の章にある。また、これまでの成果から最も自分が誇りに思うものを 3 つあげて記すことも AP の大きな特徴である (これは、教育 1 つ、研究 1 つ、サービス活動 1 つと決まっているわけではなく、教育を重要視する教員ならば教育から 3 つ選ぶ等、教員の活動スタイルにあわせることができる)。

さらに、将来達成したい目標を 3 つ記す点も「業績リスト」と大きく異なる点である。これらを十分な自己省察を行いながら記述していく。AP は一人で作成し完成させることも可能だが、ワークショップ (以下 WS) に参加し、メンター (AP 作成経験のある教員) の助言とサポートを得ながら一気に書き上げることで完成率も質も高めることができる。WS では複数回の個人メンタリングがスケジュールの中に組み込まれている。それ以外の時間は基本的に自らの活動を省みつつ行う個人作業が中心であり、適宜作成途中の AP をメンターに提出し、メンタリングを受ける。そこでの助言をもとに改訂を重ね、最終的に AP を完成させる。詳しくは、ピーター・セルディンらの書籍を参考にされたい[1]。

2012 年 3 月、大阪公立大学高専 (当時は大阪府立大学高専、以下本校) は、全国の高等教育機関で初めて単一教育機関内 AP 作成 WS を開催した[2]。その後も FD 活動として、継続的に AP に取り組んでいる。また、それに先駆けて 2008 年度から、教育に特化したティーチング・ポートフォリオ (TP)、2012 年度からは、事務職員のスタッフ・ポートフォリオ (SP) に取り組んでいる。

本校は 2019 年度まで TP/AP/SP 作成 WS を、年 2 回夏と冬に対面で開催してきたが、2020 年度は新型コロナウイ

2022 年 8 月 31 日 受理

*1 総合工学システム学科 一般科目系

(Dept. of Technological Systems : General Education)

*2 プロダクトデザインコース (Product Design Course)

*3 エレクトロニクスコース (Electronics Course)

*4 京都教育大学 (Kyoto University of Education)

*5 東京大学 (The University of Tokyo)

ルス感染症拡大防止対応のため、夏は中止となり、冬はオンラインでTP作成WSのみ開催した[3]。2021年度はTP作成WSに加え、AP作成WSもオンラインで9月と12月の2回開催した。

本稿では、2021年度に開催したAP作成WSの概要について説明し、アンケート結果を基に対面開催との差異について考察する。

2. ワークショップの概要

表1に開催したWSの主なスケジュールを示す。なお、このスケジュールは9月、12月ともに共通である。また、AP作成WSと同時に、TP作成WSを同日程で開催した。第3日午後の「APプレゼンテーション」では、作成したAPの理念や教育方法等をA4サイズ1枚のレジюмеにまとめて発表することを修了証授与の要件とした。その際、教育、研究、サービス活動の互いの連携・寄与が良くわかるように、教育・研究・サービス活動、それぞれを表す3つの円を重ねた「APチャート(三相図)」および目標をレジюмеの中に記してもらった。

表2に開催したWSの参加者数を記す。なお第19回のメンティー1名はSAP(Structured Academic Portfolio: 構造化アカデミック・ポートフォリオ)[4]コースの参加者である。ここでAPとSAPの違いを述べる。APはTPを作成済であることが前提であり、TPの凝縮版に研究、サービス活動とこれらの統合に関する記述を加える方式で作成する。一方、SAPはTPの作成を前提としておらず、事前課題としてSAPチャートを作成することで3日間のWSでAPを完成させる。

表1 開催したWSの主なスケジュール

	第1日	第2日	第3日
午前	オリエンテーション APチャート作成	個人メンタリング(3) AP作成作業	個人メンタリング(5) AP作成作業
午後	個人メンタリング(1) AP作成作業 個人メンタリング(2)	中間発表 AP作成作業 個人メンタリング(4)	AP作成作業 プレゼン準備 APプレゼンテーション 修了式
夜間	意見交換会 AP作成作業	AP作成作業	修了を祝う会

表2 開催したWSの参加者数

	メンティー	メンター	スーパーバイザー
第18回(9月)	3名(うち学外0名)	3名(うち学外2名)	1名(うち学外0名)
第19回(12月)	1名(うち学外1名)	1名(うち学外1名)	1名(うち学外1名)

3. アカデミック・ポートフォリオを執筆して

アカデミック・ポートフォリオを作成して(勇地有理)

高専教員となったころ、教育についてあまり深く考えたこともなく、場当たりの方法で教育活動をしていた。そのような1年目の夏にTP作成ワークショップに参加した。ワークショップで自分の教育について深く考え、自分の教育理念についてまとめることができ、その後の教育活動に大きな助けとなった。それから4年が経ち講師への昇任審査に向けてのAPの提出を求められたこともあり、教育だけではなくアカデミック活動全般における自身の活動を振り返るため、今回のAPワークショップへ参加した。TPワークショップでは教育について深掘りを進めていたが、APワークショップで教育だけでなく研究、サービスの3つの活動を深掘りした。教育については4年の時を経て教育内容も大きく変更していたが、TPワークショップで教育理念を明確にしていたことが助けとなり、自分の教育理念に則った純粋なアップグレードとなっていたことを改めて確認することができた。研究・サービスについても4年間の間に様々な活動をしており、今回のワークショップを通して今までの活動をまとめることができた。TP作成時は自身がしてきた教育的な活動についてその芯となる教育理念についてまとめるという作業でかなり苦勞をした。AP作成の場合はそれぞれの3つの活動の芯を考えるのに同様に苦勞をしたが、さらにそれらの繋がりを明確にし、これら3つの活動全ての芯となるものを探すと非常に難しい作業であった。最後まで考え抜いたことで完成ではないがなんとなく芯となるものが見えてきた。TPでの教育理念が助けとなったことから、今回APで得たものも今後自分のアカデミック活動に大きな影響を与えてくれると信じている。

本ワークショップはコロナ禍での実施であったことからオンラインと対面でのハイブリッド実施となった。しかし、オンラインによる不自由はあまり感じずメンターからの定期的なサポートが助けとなりAP作成の大きな力となった。このようなワークショップが難しい状況中でもそれを感じさせない素晴らしい運営でサポートくださった関係のみなさまには本当に感謝いたします。

APを執筆して(萩原悟一)

今回、アカデミック・ポートフォリオ(AP)を作成する目的は、私自身が行っている活動を整理し、自分自身のことに気づくためであった。大学教員としてキャリアをスタートさせ8年が経ち、一度これまでの活動を整理したいと思い始めていた。特に昨年、大学を異動したこ

とにより、専門とは異なる科目を担当することとなり、大学教員としての今後の進路やキャリアを考えた時、何を目指していくべきか、自分自身に迷いが生じていた時期でもあった。もう一度、原点に戻り、「なぜ、大学教員を目指したのか？」を明確にする良い機会だと考え、AP 作成に臨んだ。AP 作成の第一段階として、私の「教育理念」を明確にするところから始めたが、最初は教科書通りという感じの理念しか思い浮かばず、非常に苦労した。しかし、メンターと向き合い、じっくりと話し合う中で自己の経験や幼少時から受けてきた教育の中に「私本来の教育理念」が存在することに気づくことができた。私の教育理念には、人生における「生き抜く力」を学んでほしいということが根本にあり、教育対象となる学生には「様々な経験をする事」、「選択肢を増やすこと」、「自主的に学ぶこと」を実践してほしいという考え方があることを整理できた。教育理念は、私自身の経験や受けてきた教育による考え方であることに気づき、表面上で語っている教育理念ではなく、自分自身が納得する理念を可視化することができた。また、AP では「教育」「研究」「社会貢献」を統合することで私自身の活動の整理は基より、今後の自身の在り方や方向性を考えるととても良い機会となった。特に、研究については幅を広げすぎている感覚があり縮小しようかと考えていたが、教育と社会貢献という面からみれば、現在の活動の方向性で間違いがないことを確認できた。また、メンターに自身の活動を「教育」「研究」「社会貢献」に分けて紹介することで「本当に実現したい目標」を見出すことができた。目標を達成するために短期的、長期的に何をすべきか整理され、現在では取り組むべき課題が明確になっている。そのため、精神的に追い込まれることがなく目標に向かってすべきことを実施することができていると感じている。今回、私が考える AP を作成したことによる最大のメリットは、焦らずに毎日を安定して過ごしているということが第一の収穫である。

アカデミック・ポートフォリオを作成して（伏見裕子）

2021 年度の夏、AP 作成 WS に参加させていただいた。以前 TP を作成した時は対面だったが、今回は感染症の影響で、Zoom を使った WS となった。

最初は、対面形式でない WS がやや不安だったが、期間中の作業は夜中までかかるため、通勤時間の長い私にとっては、自宅に籠っている方が作業時間を多く取れて良かった面もある。また、自宅作業でも孤独感を感じさせない工夫（Zoom のブレイクアウトルームの活用など）が多く盛り込まれていて、非常に感謝している。

今回、AP を作成して、改めて自分にとってのコアは「人権」であることや、教育・研究・サービスが密接に関わ

っていることを実感した。

AP 作成 WS では、メンターに導かれつつ、幼少期からの自分の経験と現在の自分の活動とのつながりを深く考察した。通常、AP は「教育」→「研究」→「サービス」の順で書くようだが、私の場合は、時系列を重視し、「研究」→「サービス」→「教育」となった。柔軟な構成を許容していただいて、ぐっと書きやすくなった。

WS を通してわかったことは、自分の人生に関わるような悩みや問題が、すべて人権に絡んでくるものであり、それを認識してはじめて、打開の方向に向かうことができたということである。これは、しんどさを抱えた学生に対応する際にも、地域の問題を考える際にも、感じることである。

高専は、中学卒業から社会人になるまでの重要な 5 年間の教育を提供する機関である。高校よりも大学よりも長い修業年限で、大学受験を気にすることなく、コンパクトな組織で学年単位の行事なども比較的実施しやすい。さらに昨今は、企業でも、SDGs やダイバーシティの推進、ハラスメントの防止等が喫緊の課題となっており、さまざまな文化的背景をもつ人々との関わりもますます重要になっている。

こうしたことから、高専は、人権教育を行ううえで、これ以上ない好条件や必要性があると私は考えている。社会人として、エンジニアとして、国内外あるいは自分の生活の場や職場で生じる人権課題の解決に寄与する卒業生を輩出できるよう、高専に人権教育を根づかせることを第一の目標に、今後も教育・研究・サービス活動を行っていきたいと思う。

ワークショップで伴走してくださったメンターの竹元仁美先生に、心より感謝申し上げます。

AP 作成 WS に参加して（山下良樹）

高専着任 2 年目に WS に参加し TP を作成した。それから 3 年が経過し、高専で行ってきた『教育』だけではなく、『研究』と『高専の運営や社会への貢献（以下まとめて『サービス』と呼ぶ）』の経験をまとめ、今後に繋げるため AP の作成に至った。また、准教授への昇任審査のためのポートフォリオの更新の意味もあった。

TP 作成時と大きく異なった点は、新型コロナウイルス感染症対策のためリモートでの開催であったことである。担当して頂くメンターの先生と上手く対話が可能であるのか、また距離感等について非常に心配をしていた。実際に、担当して頂いた山下哲先生は明るく、メンティーである私をその気にして頂ける方で非常に安心した。WS 開始当初、教育の内容は過去に作成した TP を更新する程度と考えていた。しかし、山下哲先生と相談していく中で、教育・研究・サービスを 1 つのものとして考え、更

にそれぞれが私の中でどの様に連動するかをイメージするに至った。その結果、個々の相互作用ではなく、一方方向に向けて循環させる(サイクルを回す)ことが自身の今後の方針では無いかと気付いた。私はどちらかと言えば1つのものをじっくりと深く考えるよりは、新しい技術や異なる分野に興味を引かれる性格でもあり、サイクルを回して新しいことを食欲に取り入れ、螺旋階段を上昇していくイメージが自身に合っていると感じた。

AP作成に当たり、教育・研究・サービスを見直すこと以外に、『脳内で思い浮かべている内容を文章にして人に伝えること』について非常に勉強になった。自身の傾向として、どうしても細かい内容や専門用語を用いて1つ1つ説明しないと伝わらないと考えがちであったが、山下哲先生と対話を重ねていく中で人に本質を伝えるためには必ずしもそうではないことが実感できた。AP作成だけではなく、今後の人生で有用な技術にも気付くことが出来、非常に有意義なWSだと感じた瞬間であった。

作成したAPは自身の都合により当初の目的であった昇任審査には使用することは無かったが、今後も自身の教育・研究・サービスはAPに書いた様にサイクルを回していくことになる。その意味では、作成したAPは高専に勤めることに限定されず、自分自身の本質について向き合えたと言える。最後に、WSでメンターとしてご助言頂いた山下哲先生をはじめ、運営されている先生方には心より感謝を申し上げたい。

4. メンターを担当して

オンラインAPWSでメンターを経験して(竹元仁美)

2021年、コロナ禍のTPWS/APWSのあり方を模索していた私は、大阪府立大学高専(現大阪公立大学高専)の主催するオンラインを使う画期的な方法論に出会った。しかし、オンラインWSについて漠然とした理解しか持ち合わせなかったため、北野健一先生に教えを乞うべくワークショップへの参加を申し出た。“ただ飯”というわけにもいかず、APメンターを引き受けさせて頂くことになった。そこでの貴重な経験について振り返ってみたい。

事前に抱いていた疑問は、「オンラインでのメンタリングは、研修場で直接顔を合わせる場合とどのような違いがあるのか」、「今までのメンター経験から修得した方法論は通用するのか、支障は出ないのか」であった。結論から申し上げれば、2次元と3次元でのメンタリングに大きな差異はないということである。コミュニケーションに若干の危惧があったが、Zoomのブレイクアウトルーム機能を自由自在に操る技術集団のサポートに支えられ、担当させて頂いたメンティーの明るく率直な性格にも大

いに助けて頂き、不安は消え去った。

APのメンタリングでは、最初に、教員になるまでの経緯を伺うと、幼少期まで遡ることが少なくない。今回、スタートアップシートの自己紹介の欄を拝見し、まず、今後のキャリア選択、将来の目標について確認させて頂いた。これが意外にメンティーの心に刺さり、一気に距離を縮める効果をもたらした。「さすがですね」という言葉を口にされた後、実に率直なライフヒストリー、プライベートな部分も含めて語ってくださった。研究者・教育者・家庭人としての資質を保障する数々のエピソードを共有しながら、だんだんと浮かび上がってくるAPのコアをみることはメンターの大きな役得でありやりがいである。また、このプロセスは、メンティーとメンターの丁々発止の真剣勝負から作り出される“一期一会”で、二度と再演されることのない出会いの場でもある。3日間の闘いはメンティーの人生を紡いだ唯一無二のAPへ結実されていき、メンティー・メンターにとって至福の瞬間をもたらす。

今回のメンター経験により、いくつかの課題(テクニカルサポーターの養成、予算の確保など)は残るものの、コロナ禍の自大学でのオンライン・ワークショップの実現可能性は、ぐっと高まったと感じている。システムティックかつ計画的な教育改善をすすめるために、パンデミックに左右されないオンライン・ワークショップの可能性や真価を感じた貴重な機会となった。この機会を与えてくださった北野先生をはじめ関係者の方々、多くの喜びを共有させて頂き、メンティーに深謝申し上げたい。

APメンターを経験して(東田卓)

これまでAPWSの中で、十人を超えるAPのメンターを経験させて頂き、多くの先生方の「大学人としてのあり方」を見せていただいた。APの特徴として、「教育・研究・サービス」の3つが交差する三相図を書くのが一般的な做わしとなっている。この3つの関わり方が先の「大学人」としてのあり方の個々の先生らしさと感じており、私はAPを執筆して初めてポートフォリオの良さを痛感した。今回、初めてオンラインのAPメンターを経験した。私のメンタリングの主な手法として、最初にこの三相図を一緒に見て・書き・まとめながら、メンティーの大学人としての思いや人となりを見せていただき、メンターとして伴走させて頂くスタンスを取っている。今回メンティーは学内関係者であったので、このスタイルを踏襲することができた。オンラインのワークショップのメリットとして、「会場までの移動時間が無い」、出張の場合は「慣れない宿舎での執筆が不要」などのメリ

ットがある。しかし、オンラインではどうしても執筆に悩みを持つメンティー間の「横のつながりの欠如」や、「メンター・メンティーの見えない壁」ができてしまう難点がある。今回はハイブリッドにより、三相図の執筆のみ対面で行い、後半をオンラインで行う手法で進めた。三相図を座って対面で見、上から俯瞰して再度見、再度二人でゆっくりと見回してKJ法で付箋を執筆・追加・移動させる手法は、メンティーの頭の中を整理する方法として大変良くできた手法であると感じている。最初は「ベン図」のような一般的な丸を3つ書くオーソドックスな三相図であったが、途中から手書きをデジタル化して、PowerPointの図の中に落とし込み、最終的にできあがったカバーページはとてもユニークなまとめ方となった。これはメンティーが本校卒業生であり、かつ本校学友会執行部として学生側から学校を強く支えてきたI先生らしい思いが詰まったAPとそのカバーページになったこととして深く印象に残っている。今後、完全オンラインでAPの三相図を書かなければいけないことも視野に入れなければならないが、より深くメンティーの思考の整理ができる三相図のまとめ方をオンラインでもこれから考えていきたい。

(備考:「学友会執行部」とは一般の高校の生徒会や生徒会室に相当する学校組織の一つ)

オンラインAPWSでメンターを担当して(山下哲)

私がTPを作成したのは高専教員19年目、APを作成したのは21年目だったため、十分な経験の下で作成できた。しかし、担当したメンティーはTP作成が高専教員2年目、AP作成が5年目と浅い経験の下で作成しなければならなかった。私の時とは真逆な条件下でのAP作成に私自身がどれだけサポートできるかという不安があり、さらに、オンラインという制限の下できめ細かなサポートができるか心配だった。

APでは、教育・研究・サービスについてそれぞれの主な特徴をまとめ、これら三者の相関関係について説明する必要がある。まず、教育については、実践例が少なく、目標を中心とした内容のTPから主な特徴を抽出しなければならないという問題があった。しかし、TPの目標に沿って3年間の教育実践を追加したことが功を奏した。この意味でTPに基づく教育実践は教育改善のために有用であると感じた。研究については、元々非常に問題意識が高く、自身の研究テーマを充分抽出できた。サービスについては、経験は少ないものの、教務・学生に関わる役割を担当し、公開講座も積極的に開催していたことでまとめられた。最後の大きな問題は、教育・研究・サービスを結びつける根幹を見出すことだった。オンラインではあったが、メンティーの子供時代の夢から始まり、学生時

代、教員時代と過去を振り返りながら、メンティーが自分自身を見つめ直す旅と一緒に伴った。その結果、現在のメンティーの信念である「真理の視覚化」というキーワードを見出すことができ、メンティーと一緒に感動した。

メンティー自身が見つめ直し深掘りしてもらうためには、対面かオンラインかという形態ではなく、個人メンタリングでメンターとメンティーの息が合うことが最も重要であると思った。これは教員と学生との間でも同じであり、息を合わせるという新たな認識と共に大変有意義な時間を過ごすことができた。最後に、この機会を与えてくれた大阪公立大学高専スタッフに感謝の意を表したい。

5. スーパーバイザーを担当して

スーパーバイザーからみたオンラインAPWSの特徴(栗田佳代子)

2021年度冬のWSにスーパーバイザー兼メンターとして参加した。

スーパーバイザーは、5,6名程度のメンターを支える存在である。具体的には、メンティーとの1対1の面談であるメンタリングの前後に開かれるメンターミーティングにおいて、ミーティングの進行役を務め、メンターが効果的にかつ健やかにメンティーを支えられるようにメンターの不安を取り除いたり、具体的な助言を与えたりする。

今までも何度かスーパーバイザーの役割を務めてきたが、これまでと大きく違う点は、本ワークショップがオンライン開催であったことである。当然ながら、メンターミーティングもオンラインで開催される。結論から言えば、対面との比較において、メリットとデメリットの双方があるが、これらを認識した上で臨めば、オンラインのWSにおいても対面にとほとんど変わらない支援が可能である。

まず、メリットとしては、情報共有がより容易にかつ豊かにできるという点が挙げられる。今回は各種資料やTPおよびAPの原稿がGoogle Classroomによって管理された。このことによって、メンターミーティングにおいて、メンター全員に当該メンティーの原稿が共有できる環境が容易に実現し、メンター自身の学びに大きく寄与することができた。メンターミーティングは、メンターが成長する場でもある。成長を促す方法のうちミーティングで実現しやすいのは、多くのメンティーのTPやAPの途中原稿にふれ、その支え方についての議論に加わり、他のメンターやスーパーバイザーのコメントに耳を傾けることである。それがオンラインだと誰もが原稿を正確

に確認できることで、メンターミーティングをより密度の濃いものとすることができ、それがメンターの成長に寄与する。

一方、オンラインの限界を強く感じた点は、ちょっとした個別のコミュニケーションができないという点である。対面であれば、少し気になるメンターやメンティーに簡単に自然に個別に話をするのが可能である。一方、オンラインだと、そうしたことが全て「明示的な設定」を必要とする。この点は、メンターに不要な緊張感を持たせるおそれがあり、「黒子」のように振る舞うスーパーバイザーにとっては、困難を感じた点であった。そのため、メンターミーティングの雰囲気づくりは、対面時よりも和やかとなるようより一層気を遣ったという印象がある。

メリット・デメリットはそれぞれもちろんこれだけではない。しかし、特にここで挙げたデメリットは、アプリケーションの発達により解消される可能性もあるが、画面越しであることには変わらない。スーパーバイザーはメンターを支える立場から、オンラインWSの限界に常に留意する必要がある。

6. メンティーの事後アンケート

WS終了後にメンティー4名にGoogle Formsでアンケートを実施した。4名中3名から回答が得られた(回答率75%)。表7にアンケート結果の一部を示す。

この事後アンケートの設問は、これまでの対面式WSの事後アンケートの設問と同じである。したがって、今回のオンラインWSの効果を検証するため、表3に記した4個の質問項目について、これまでの対面式WS参加者の回

表3 事後アンケート結果(一部抜粋)

3. ワークショップのプログラム設計について
(2) ワークショップは自身のキャリアにとって有意義な内容だった (そう思う 3名, どちらかといえばそう思う 0名, どちらかといえばそう思わない 0名, そう思わない 0名)
4. ワークショップのスタッフについて
(1) メンターからの助言は役に立った (そう思う 3名, どちらかといえばそう思う 0名, どちらかといえばそう思わない 0名, そう思わない 0名)
5. ワークショップの成果について
(3) アカデミック・ポートフォリオは自身の業務改善につながる (そう思う 2名, どちらかといえばそう思う 1名, どちらかといえばそう思わない 0名, そう思わない 0名)
6. ワークショップ全体について
(1) ワークショップは全体的に満足できるものだった (そう思う 3名, どちらかといえばそう思う 0名, どちらかといえばそう思わない 0名, そう思わない 0名)

表4 オンライン式と対面式の比較

質問項目	運営方式	オンライン(n=3)	対面(n=41)
自身のキャリアにとって有意義な内容だったか		4.00	3.76
メンターからの助言は役に立ったか		4.00	3.80
自身の業務改善につながるか		3.67	3.63
全体的に満足できたか		4.00	3.88

答と比較した。「そう思う(4)」、「どちらかといえばそう思う(3)」、「どちらかといえばそう思わない(2)」、「そう思わない(1)」と、回答を()内の数値に置き替えて平均を取った結果を表4に記す。この結果より、オンライン式においても、対面式と同程度の効果が出ていることが伺える。ただし、オンライン式の回答数が少数のため、今後はサンプル数をもっと増やした上で議論する必要がある。

7. おわりに

本校が2021年度に2回開催したAP作成WSについて報告した。2回ともオンラインで開催したが、AP作成だけを目的とすれば、対面WSとほぼ遜色ない効果が出るのがわかった。本校では今年度も9月6~8日と12月26~28日に、AP作成WSをオンラインで開催する予定である。

謝辞

本研究はJSPS 科研費 17K01001, 20K12094 の助成を受けたものです。

また、拙著に寄稿いただいた萩原悟一氏(九州産業大学)、竹元仁美氏(令和健康科学大学)、山下哲氏(木更津工業高等専門学校)に心より感謝します。

参考文献

- [1] ピーター・セルディン, J. エリザベス・ミラー著, 大学評価・学位授与機構監訳・栗田佳代子訳, アカデミック・ポートフォリオ, 玉川大学出版部(2009).
- [2] 金田忠裕ほか: 日本初単一教育機関内アカデミック・ポートフォリオ作成ワークショップを開催して, 大阪府立大学高専研究紀要, 第46巻, pp. 71-76(2012).
- [3] 北野健一ほか: 日本初ティーチング・ポートフォリオ作成オンラインワークショップを開催して, 大阪府立大学高専研究紀要, 第55巻, pp. 31-38(2022).
- [4] 吉田星, 栗田佳代子: 構造化アカデミック・ポートフォリオの開発, 日本教育工学会研究報告集, 14(4), pp. 15-21(2014).